
ほろび鳥

北郷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ほろび鳥

【Zコード】

N6098M

【作者名】

北郷

【あらすじ】

ある土地でしか生きられない不思議な能力のある鳥と人間。その土地を取り戻そうと・・・。

(前書き)

このお話はフィクションです。実在の人物、団体、事件などには一切関係ありません。全てを空想の世界のお話とお受け止め下さい。

「シユツ」夕闇の中で、顔をかすめる様に鋭利な風圧が通り過ぎた。

風が通り過ぎた方に田を向けると、そこに居たのは一羽の鳥であった。

「脅かすなよ~」

その鳥はここに居るべき鳥であつて、それは何の不思議な出来事ではないのだ。

本当に驚くべきことはその後に起つたのである。

始めは微かに「キーン」と重い高音が耳に届いただけであったが、間もなく耳を突き刺すばかりの音量に増幅して行ったのである。

僕は音の発生場所を確かめようとした。その瞬間である。大げさでは無い。本当に空間が引き裂かれるのではないかと感じられる震動を感じた。

頭上には鳥達が七色の羽を眩く光らせて羽ばたいている。

僕は何故かこの震動が鳥の羽ばたきのせいだ。そう思った。

鳥達は、次第に僕の周りを囲むように高度を下げる。

抜けた無数の羽が七色に輝きながら空を舞い、僕の体を強い風が包み込んで行く。

眼は、砂埃と風圧で開けることが困難だ。両手は耳を守るので精一杯だ。

閉じた田蓋の裏には七色の残像が渦巻いている。

僕は恐怖を感じ、その場を離れようと出口に向かおうとしたが、脚が前に出せない。いや、金縛りに会った様に体が全く動かせない。

鳥は8羽しかいないはずなのだが、数えきれない鳥が僕を取り巻き、甲高い鳴き声を発している様に聞こえてくる。

僕は恐怖に崩れ落ちそうになつた。

その時である。閉じた目の前に大きな存在を感じた。

そして、鳥達とは対照的な、低く太い声が両手で塞いだ耳に届いて来た。

「お前たち、人間の・・・」

そこから先の記憶が、定かではない。

僕は稀少種の保護や繁殖を目的に、昨年一部だけオープンした野生動物保護園に先月配属になつた。

前任者が病気の為に退職した、後任としてである。

動物好きの僕が、大学の畜産学部を卒業して3年。希望が叶つたのだ。

この保護園には3年前、発見された8羽の野鳥が繁殖を目的に保護されている。体長1m程で、羽ばたくと七色に輝く綺麗な鳥だ。当時は、何故今まで発見されなかつたのかと、結構話題にもなつたものだつた。

名前はこの地方で伝説となつてゐる怪鳥と色合いが似ていることから、その名前を取つて”にじみつき”と名付けられた。

ただ、伝説の”にじみつき”は、大きさが人間の3倍程あり、羽の先には人間の掌と同じ5本の指が付いる。そして、何より人間と同等の知能を持った鳥なので、この鳥達とは大きく異なっている。まあ、何かにこじつけて、神秘性をあおるのも珍しいことではない。

この保護園は事実上、この鳥達がきっかけとなつて設立されたのだが、今後は様々な稀少品種の動物達の保護と繁殖を行い、大規模な施設になる予定になつてている。

僕と園長の2人は、その先陣と言つわけである。

今、保護園の中に建てられた長さ80m程ある飼育棟には、自分一人だけである。

「ああ～疲れた。さて、早く帰ろつ。記録を付けても9時過ぎには帰れるかな。みんなもゆっくり休んで子作りに励んでくれよ。なんて・・・」

日中騒がしかつた虫の音も静かになつたその中で、そう鳥達に話しがけた。

僕の耳を不快な甲高い音が突き刺し、意識を失つたのはその直後のことであった。

ひんやりとした頬の冷たさが気持ち良い。

「あれ？どうしたんだ」

何か違和感を感じるのだが、何の違和感なのかよく分らない。ほんやりとした心地良さが思考を妨げている。

しかし、次第に意識がはつきりして来るに従い違和感が不安感に変わつていった。

僕はいきなり上体を起こした。

「ここは・・・、何処だ?」

辺りは暗闇で全く何も見えない。

そこに声がした。

「びっくりした!、急に起きるんだも」

暗闇に目が慣れていないので良く見えないが、若い女性であることは明らかである。

「えつ?」

(確か僕は、鳥達に囮まれていたはずだが・・・。)

重い体で彼女の方を向いた。

「大丈夫? 良かつた。奴らに見つかなくて。ここまで運んで來るのは。重かつたんだから」

次第に目が慣れて来て、微かに周りの様子が確認出来る様になって来た。山林の中といった感じである。

(どういうこだ、それに・・・)

彼女の”奴ら”と言つ言葉が気にかかるが、僕は驚きで声に出来なかつた。

彼女は、僕の驚きに微笑んで続けた。

「その驚きは、きっと、あなたも私と同じなのね
(同じ?)」

僕は彼女の言葉を食入る様に聞いた。

「もし、此処には人間が私達の他にいなつて言つたら?」
「えつ? 人間がいなつて・・・」

薄つすら見える彼女の表情が、やつぱりと言つ顔付きである。

「そう、ここには・・・」

その時、少し離れた空から、かなり明るい照明が地面を照らしてこちらに近づいて来る。僕は直感的に危険を感じた。

「彼女がその瞬間、僕に言つた。

「まずいわ、逃げなきや。動ける?」

「うん、大丈夫みたいだけど」

「彼女はニッコリと頷いて、

「早く!こっちへ急いで」

と、僕について来る様に促した。

何が何だか分からなかつたが、彼女が助けてくれたのは間違いないようだ。僕は彼女の指示に従つて、草むらの間をすり抜け、川辺の岩穴に移動した。

「ここにくれば大丈夫。ようこそ私の家へ」

彼女が家と言つているのは、ただの洞窟に、地面に草が敷き詰められているだけのところであつた。

「汚いところだけど座つて」

「あつ、ありがとう」

彼女と並んで座ると、彼女は見たことの無い大きさの野苺の様な実を、掌一杯に渡してくれた。

「こんな物しかないけど、食べて。私、ひとりつきりだと思つていたから、凄くうれしいんだ」

彼女はそう言つて、本当に嬉しそうに笑つてみせるが、僕にはさっぱり状況が掴めない。

「ごめん、聞いてもいい?」

「そつかー、私と同じ状況だったのよね

「・・・・

彼女の名前は、みやせまな宮瀬麻奈と言つた。

僕等は此処に来る前に起こつた出来事や、今までの生活について語り合つた。そして、彼女からこここの話を聞かされた。

彼女の話は、僕の血の気を奪つていつた。

彼女は僕と同じ、或いは同じような世界に居たらしい。そして、同じ様な出来事が起こり、気付いた時にこの世界にいたのである。僕と全く同じである。

この世界には、彼女の知つている範囲では、自分達以外に人間が存在しない。そして、一番の問題は、この世界を支配しているのが、七色に輝く体長5～6mもある、人間の同様の知能と、翼の先に手のある鳥の化け物だと言つことである。

まるで、伝説の鳥「にじみつき」の話である。

その鳥達は、しばしば彼女を襲つてくるとのことだ。さつき、逃げたのもその為であった。

その日から僕と彼女の共同生活が始まった。

翌朝明るいところで見ると、彼女はスリムでショートヘアの似合つ行動派と言つ感じの女性で、笑顔がとても素敵であった。

僕と彼女は、この状況下のせいもあってか、とても気が合つた。気がつけば、こんな状況を楽しんでいる自分がいることに気付いた。

僕達の行動は、鳥達の遭遇を避ける為、早朝または、夕暮れの短い時間以外は、殆ど住みかの洞窟を出ることはなかった。その為か、

この世界に来た日以来危険な事に出会つことは無かつた。

そんな生活が暫く続いた。僕達のお互いへの素直な気持ちは、ある夜、一人の距離を無くすることになった。

薄暗い外からの光は、洞窟の入り口付近で途絶え、彼女の息遣いと温もりを全身で感じた。

彼女の体は温かかった。

その時から、自然と互いを名前で呼ぶようになっていた。
僕は麻奈^{まな}がいれば、ここで生きて生きていくと思つた。

翌朝、僕等はいつもの様に食料を集めに洞窟の外へでた。ただ、いつもと違うのは、一人の肩は、常に触れ合つ距離であった。

魚を捕ろうと、昨日洞窟から100m程の所にある小川に罠を仕掛けっていた。

僕達はワクワクしながら、そこに向かつた。しかし、その仕掛けた罠が仇となつた。

僕らの居場所を鳥達に気付かせてしまつたのだ。

魚を捕る為の仕掛けを触つた瞬間違和感を感じた。

「逃げる」

僕らが走り始めた瞬間、「ドスン」と言つ、大きな爆発音が鳴つた。それと同時に大きな網が僕らの上空一体を埋め尽くした。網は少しそれた。僕は目測から咄嗟に横にいる麻奈を突き飛ばしていた。

幸運にも麻奈は、網を逃れた。

「逃げる」

麻奈は首を振り動かない。

「早く、何してるんだ。逃げろ」「

彼女を守りたい一心だった。

しかし、彼女の涙は僕の心より重かった。

間もなく鋭い突風が吹き、そこからの記憶が無い。

気が付いた時、僕等は周囲が高い塀に囲まれた屋外スペースの中であつた。一面には散雑ではあるが芝が敷かれている。中央に人口の小川が流れしており、檻の隅には小屋がある。

僕等が入れられた時には既に、6人の先人が捕らわれていた。僕と麻奈を含め8人である。

飼育等に保護している8羽の鳥を思い出してしまう。

先人達は僕等よりも少しだけ古い時代に感じられた。しかし、言葉もほぼ通じで、凄い優しく温かな人達であった。これは、僕達の救いであった。

ここでの生活は、味気はないが食事も毎日3回与えられ、鳥達から決して暴力を受けることは無かつた。

それでも、当然日々の恐怖は付き纏う。それに、閉鎖された空間での生活は単調なものである。そんな中、彼女がいてくれることが僕の支えとなつた。それは、麻奈も一緒だつたと思う。

何となく、この世界に来る前での自分の仕事が思い出されていた。

おかしな位あつと言つ間に、一ヶ月位が過ぎた。その時、大きく失望する変化が起きたのだ。

男女一人ずつ小部屋に閉じ込められたのである。部屋と、外との

繋がりは、開かない窓が一つあるだけだ。ここから出ることは出来ない。中にはベッド一つのみある。

何より一番僕を失望させたのは、僕の目の前には麻奈がいなかつたことだ。麻奈は、違う男性と同じ部屋である。そして、僕の目の前には、別の女性がいる。

彼女は僕の3つ年下で、寧々と言った。

陽に焼けた褐色の肌に腰まである黒髪が奇麗な魅力的な女性である。

この意味は、考えるまでも無い。

この状況はペアリングだ。6人は一族なのである。当然血の違うものとペアになる。

彼らの目的は、これではつきりと分った。

きっと、僕等8人と言つ希少な生物の保護と繁殖。これ以外には考えられない。

そうなると、逸早く子孫を残すことが、この部屋から人間と言う生物が出られる早道なのは確かである。
子孫が外の世界に出されることになれば、外界も人間の住み易い環境になる様に鳥達も動くだろう。

しかし、自分達は籠の中のままである。恐らく、そこそここの数と環境が揃うまでは、檻の中の生活なのは間違いないだろう。人間の繁殖能力からいけば、僕等から何世代の間かは、この中の生活になるのは間違いない。

そして、決められた間の結びつきを強要される。

今、私達を保護している彼らの人生が、人間と比較して、どの程度の長さであるか分からない。

しかし、私達の何倍もの長さを生きるのであれば、彼らにとつて

は、我々の何代かの人生に重みは感じられないであろう。

僕達8人は人類の為に子孫を残すべきか、それとも生まれてくる我が子の幸せを願つて子供を作らないべきか。真剣に考えなければならぬ。

しかし、僕の心にそんな余裕は無かつた。一日中が、麻奈のことで頭が一杯だ。

そんな僕とは対照的に、寧々は落ち着いていた。

僕よりも先に状況を飲み込んで僕を受け入れようしてくれている。彼女は、運命に従おうとしている。拒んでいる僕に不快感をも示さずにいつも優しくいたわってくれている。麻奈のことばかり考えている僕をだ。

僕は次第に寧々の気持ちが胸に痛く入り込んで来た。

彼女が笑顔で言った。

「麻奈さんよりも先に私が会つていれば良かった」
その本位は、僕には分らない。聞く度胸もない。
きっと、麻奈がいなれば、僕の本能は直ぐに彼女を受け入れたことであろう。

「めん

僕はそれ以上語ることが出来なかつた。しかし、彼女は

「分つてます」

そう、応えてさらに上の笑顔を見せてくれた。

それから2週間。

麻奈が外に出ていた。一緒に居るのは、恐らく同室だった男である。「もしかすると彼女は、そう思つと居た堪れなかつた。

足に力が入らない。立っている」ジビで精一杯だ。

きっと、彼女も僕と同じに悩んでいたに違いない。彼女の下した結論に僕は何も言えはしない。

それでも…

僕の描いていた空想と共に、気持ちも崩れて行つた。ただ、本能のまま走ることで忘れてしまったかった。

その結果、僕は寧々に…

彼女は、こんな身勝手な僕を何の抵抗も無しに受け入れてくれた。心の荒れた僕を彼女は優しく労わってくれた。

僕は彼女の中に深く沈んだ。

その日から僕の心は次第に麻奈から寧々へと移つて行つた。と言つよつは、自分から気持ちを切り替えようとしていたのである。

その結果、僕達は子供を授かつた。

僕と寧々は外に出ることを許された。そこには麻奈がいる。

最初は、お互に目を合わせることすら出来なかつた。しかし、思い切つて僕から話しあげて見た。責めて友人として普通に話をしたい。

落ち付いた僕はそう思ったのだ。

麻奈もそう思つていたに違ひない。僕の話に彼女も応えてくれた。

落ちついたのは、僕の心が寧々に移つていった証拠であるかもしない。

数ヵ月後、彼女達は別室に移された。

退屈な毎日の支えは生まれて来る子供になっていた。

普通長く感じられる退屈な日々が、不思議とあつとこう間に過ぎていった。

何故か・・・。

ある日。

麻奈は無事出産を終え、子供と一緒に戻つて来た。しかし、寧々は戻つてこない。

麻奈はそんな僕を気遣つて話しかけてくれた。

「見て、可愛いでしょ」

「ああ」

正直言つて、他人の子を可愛いと言つ余裕が無かつた。

麻奈は子供に話しかける。

「パパ、つれないわね~」

「冗談は、止めてくれ」

冷たく言い放つた。

言つてから失敗したと思つた。嘘でも冗談と笑うべきであつた。

そこには、麻奈の悲しそうな顔があつた。

「ごめんなさい・・・」

彼女はきつと、僕の気持ちを紛らわそつとしてくれたのだ。

そう思つたのだが、謝りそびれてしまった。

それがきっかけで、麻奈とも話すことが殆ど無くなつたて行つた。

2か月が経過した。それでも寧々は戻つて来ない。

ついに僕は、ある夜つにむしゃくしゃした気持ちから外に向かつて叫んだ。

「僕の意思を無視するな。彼女を返せ。自由に生きさせろ。僕らの気持ちをお前達の望みとは違うんだ」

無駄と思いながらの抵抗だ。しかし、その時何かが起ころうな気がした。

叫んだ僕の周りに甲高い鳴き声の鳥が次第に数を増していった。全くこの世界に来た時と同じ状況が訪れた。

僕は、また気を失った。

僕は元の世界の保護園の事務室に横になっていた。

僕は飼育棟の中で倒れていたらしい。園長が運んでくれたのだ。目が覚めたのは翌早朝なので、時間にして10時間位しか経っていないのである。

あの1年以上?の歳月が・・・。

翌日休みもらつた。1口をベッドの上でゆづくと休み、考えた末にこの不可解な出来事を夢だと結論づけた。

いや、僕の知識では夢意外にはありえない。通常の夢・・・。

そして、日に日に元の気持ちを取り戻していくつた。
それから1ヶ月後。

この保護園内には、飼育棟から30mほど離れたところに将来を見据えて、一般向けの3階建ての見学塔が建てられている。と言つても、遠目から眺める一時の話題が去つた鳥が8羽だけでは、オーブンしてからの1年間に十数人しか見学に訪れた人がいないのが現

状だ。

僕は飼育棟から事務所に戻る途中であつた。
しかし、最近は真直ぐに戻らず、見学塔に寄るのが行動パターンになつてゐる。

それは、こここの掃除を担当している女性、寧音やすねと一緒に事務所に戻る為である。

彼女は僕が倒れて間もなく臨時職員としてこの保護園に採用されたのだ。

寧音は背格好から雰囲気まで寧々を思わせる温かい女性だ。
お陰で、今の僕は毎日が楽しい。

僕が見学棟に入ると、聞き覚えのある一人の女性の話し声が聞こえて来た。一人は寧音である。しかし、もう一人の声が誰であるのかが分らない。

声のする3階に上ると、そこに居たのは寧音と、赤ん坊を抱いた若い女性であつた。
僕の階段を昇る足音に気付いた赤ん坊を抱いた女性は、僕の方に顔を向けた。

彼女と視線が合つた。この感覚は既に経験済みである。
夢と位置づけした、あの出来事の中で。

僕は手に持つていた双眼鏡を落した。
思考が働かない。しばし茫然とした。

彼女は麻奈そっくりなのである。いや、麻奈だとしか思えないの

だ。

「どうしたの」

僕が双眼鏡を落とした音に、寧音がこじらひを向いて驚いている。その声で、我に返った。

「いや、ごめん。何でも」

僕は驚いた顔を見られない様に視線を落とし、双眼鏡を拾い上げた。その間に必死に平静な顔を作り上げた。

恐る恐る、僕は彼女に話しかけた。あの出来事が夢であることを確認する為である。

彼女は、僕に対して初対面の対応であった。安心した瞬間僕の口は滑らかになり、彼女との会話が弾んでいった。

彼女は只の見学者であった。

それを見て、寧音は彼女の対応を僕に任し、掃除の続きを2階に下りて行つた。

寧音がいなくなると彼女は子供の顔を僕に見せると、「可愛いですよ」

そう、幸せそうに笑つた。

僕は、ありきたりに

「可愛いですね」

と応えた。しかし、何故かとても愛情を感じてしまつ。

彼女は僕の言葉に幸せそうな顔を浮かべる。

その顔が僕には本心から嬉しかつた。きっと、麻奈と重ねていたのだと思つ。

しかし、彼女が変な冗談を言つて来たのをきっかけに、気持ちがざわめきだした。

「今日のパパ、優しいね～」

「えつ？」

僕は一瞬耳を疑つた。

驚いている僕に彼女は笑いながら、種を明かしてくれた。
「ごめんなさい、あなたがこの子のお父さんに似ているものだから」

「・・・」

彼女は、主人とは言わなかつた。

僕は苦笑いをするので精いっぱいである。あの光景が蘇つてくる。

暫し沈黙した後に、彼女は真面目な顔で、窓から飼育棟を眺めながら、いきなり違う話を始めた。

「この鳥達の元になつた、伝説の鳥の別名を知っていますか

「他に呼び名があるんですか？」

「ええ、私の生まれてところでは、ほろび鳥って言つんですね」

彼女はこの鳥について説明してくれた。

伝説とは、黄、七色に輝く巨大な鳥がこの村を支配していたと言う話である。

自ら滅びた知的な鳥、余りに体が大きい為に増えるに従つて、あたりの自然を破壊していくた。周りの動物達の環境が自分達のせいで破壊されて行く。

それを悲しんだ鳥達は、子孫を増やすことを制限していくた。そして、次第に数が減つて行き、ついには滅びてしまった。そんな鳥達。

彼女は悲しそうに話を終えた。

湿つぽくなつた状況を変えようと、僕は明るい話を持ちだすことにしてた。

「今度、鳥達のペアリングを行つんです。上手くいくといいんです

けど

「そなんですか。鳥達の思い通りのカッフルになつて欲しい」
彼女は、抑揚のない口調でそう呟いて、僕を見つめた。
ドキッとした。

「お幸せなんですね」

「はあ、ありがとうございます」

突然の言葉に、意味の合わない回答をしてしまった。素直に僕と寧音への祝福の言葉と受け取ってしまった。

彼女が一瞬下を向いたのは、僕の回答が的外れであつたせいだろうか。そして、

「鳥達の妊娠つてどの位で分るのかしら？2週間では分らないわね。人間のように」

今度は、微笑みながらそう言った。

「・・・あの～、それ・・・」

そして、僕の言葉を聞かないままに、踵を返すと、早足で展望室を出て行つた。

目に光る物を感じたのは氣のせいだったのか。

僕はしばらく黙つたまま動けなかつたが、言い忘れた言葉を思い出して彼女を追いかけよつとした。

そこに、擦れ違ひ様に寧音が僕の前に現れた。

僕は追いかけるタイミングを失つて、窓から彼女の姿を待つた。

「また、来て下さい。是非、来て下さい」そう、声を掛けたかつたからだ。

しかし、いつまで経つても彼女の姿は現れない。

(まさか、消えた・・・そんな訳・・・)

裏やぶを抜けて帰ったのだろうか。（あんな所を？）そう考えるしかない。

背筋がザワツとする。

その時、窓に向つた僕の背中に寧音が飛び付いて來た。

「ねえ、ご飯食べに行きましょ」

もうすぐ、今日の仕事は終わりである。背中が温かい。僕は振り向いて

「何が食べたい」

そう、聞いた。

「ん~、何でもいい。一緒に食べれば、何でもいい

「わかった、じゃあ飼育棟に忘れ物を取りに行くから、その間に考えとくよ」

「うん」

僕は、うかつにも飼育棟に管理ファイルを忘れてしまっていた。

「よし、急いで行って来るね」

「うん、事務所で待つてる」

僕は急いで、見学棟を出た。

一人になると、背筋のザワツしが蘇る。さつきの彼女の言葉が、突き刺さつたままだ。

気になる。

（まさか、あの子は僕の・・・）

そう思つと、血の気が引いて行く感じに襲われた。罪悪感が僕を襲つてくる。

自然、否定の言葉を考え出す。

（そんなことはないのだ。僕がきを失つていたのは10時間程度で

ある。子供なんてありえない）

そこで、考えるのを止めた。あれは夢なのだ。

しかし、飼育棟に入ると、今度は彼女のほろび鳥の話しが脳裏に付き纏う。

もしかすると、この鳥達は、生まれ変わりで今度は滅ばない様に小さく生まれて来たのかもしれない。余り周りに干渉することもなく、干渉されることもなく。ひつそりと。そういう運命を選んで生まれて来たのかもしれない。

僕は鳥達に話掛けていた。

「お前達は、ここが幸せなのかい、外に出たいとは思つのかい。自分の意中の鳥との間の子供を欲しい」と思つのかい」

鳥達はの反応は無い。当然である。

そう言つた自分が可笑しくなつて來た。

「いや、何を言つてるんだ。冷静になろ。鳥がそんなこと考える訳ないか。愛情を込めて世話をすれば、きっとここが幸せなはずだ。僕は自分の仕事を一所懸命にやるだけ。それが僕の使命なんだ。この鳥達と施設、それに環境の為に」

そう言つた瞬間、不快な甲高い音が鳴つた。鳥達がざわめき出す。

（まさか）

僕はその場から逃げようと必死に走った。

沢山の鳥達が七色の羽を眩く光らせて、僕の頭の上を羽ばたいている。もう少しで出口と言う所で、風が吹き荒れ目が開けられなくなつた。足も動かせない。

そして、いつかと同じ、田の前に大きな存在を感じた。

（あの時と同じだ。錯覚何かじやなかつたんだ）

低く太い声が耳に届いた。

「お前達人間の・・・」

(僕は、僕は、彼女と、『はんを食べにいかないと

低い声は続いた。

「・・・個々の心を潰す」

「・・・なんうて、倒れちゃつたよ、まじめ君。次、目覚めた時は、前の子みたく”いつちやつてる”かもね。お姉ちゃん、もつ単純にこの土地から追い払つた方が手つ取り早いんじゃない?」

「駄目よ寧音。急にそんなことしたら、何か凄い対策を打つて来て、私達が危険よ。徐々に、誰も寄り付かない様にするの」

鳥達を見つめて続ける。鳥達の表情が人間の様に豊かな表情に変わる。

「私たちの元の生活を永久に取り戻すの。もう何千年も続いたここでの生活を・・・みんな、ここでしか生きられないのだから」

「ホントにお姉ちゃんそれだけなの?楽しんでいるみたい。この子可愛いし!」

「あんたも、一緒でしょ」

「まあ、そうかもね。お父様も、園長を楽しんでるみたいだし」

「ハハハ」

寧音と姉、それに姉の手にしている者が、声を上げて大笑いをする。

「お姉ちゃん、次はどんな粗筋なの」

「内緒」

「また、アドリブ〜?」

「頑張つてよ〜」

そこで、姉が自分の手にしている者に耳打ちをする、するとそれは深い笑いを浮かべて領いた。

姉の麻奈が、倒れている男を見て言つ。

「カーくん、そろそろ、彼と同じ夢? の世界に連れてつて」

それに、姉の手にした七色の羽の鳥が低い声で応える。

「わかった」

8羽の鳥達が耳を突き刺すばかりの甲高い鳴き声が響き出した。

同時に2人と8羽の田が一斉に七色に輝いた。

「ねわり」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6098m/>

ほろび鳥

2011年1月20日01時30分発行